

ファックス機

佐藤 紀子 カナダ

ひところは母と私を結びぬしファックス機明日(ごみ)として出す
ズズズとファックス機より少しづつ母の手書きの字があらはれき
まだひと箱戸棚の中に残りやりファックス用の感熱ロール紙
ファックス機に感熱ロール紙セットして待ち受けろしを手が記憶する
さくら散り広くなりたる青空に花水木の白まばゆきばかり

カタクリの花

柏崎 睦 岩手

体温をのがさぬやうに首に巻くネツカチーフの絹やはらかし
北国の十年ぶりの寒さ去り気温ゆるめばからだよろこぶ
玄関に客のごとくに入りきたるうすくれなゐの梅の花片
カタクリは五十の花をさかせたり夫なきあとの寂しき庭に
花苗の鉢を片手にささげもち老人ひとり坂のぼりくる

天にちかき病室

中津川 勤 坐 埼玉

天にちかき病室の窓見おろせばわれ無き街に灯りさざめく
長き名の隣のやまひを繰り返ね丸めて捨てむ天の手もがも
ファゴットとトロンボーンが snore のうたを奏でる真夜の病室
看護師は伊賀者ならん丑三つにわが寝姿を鋭目にて覗く
十日余も妻と離れてゐたことは無かつたなあとぼやけり胃の腑

鼓草

伊 沢

玲 千葉

やはらかな春の陽のさすバスのなか孵化するやうにスマホが震ふ
みほとけのさしのぶる手のかたちして水面に枝をひろぐるさくら
散り敷けるうすくれなるの花びらが風に卷かれてするブレイキン
枝垂れ桜のしだる先のさきにあり空まさをなる秋のブラジル
とほつ世の貴なるひとの手をはなれ工事現場に咲く鼓草

空爆の傷

三 枝 英 夫 東京

平林寺裏の林に入り行けば声細々と冬のこほろぎ
老人の足に便利なシルバースパス知らぬ町まで今日バスで行く
わが町の古刹に立たす石地藏空爆の傷あらはに残る
三階の窓に掲げし鯉幟団地の空を気ままに泳ぐ
空爆に腹抉られし墓石の古りてわづかに苔をば纏ふ

白藤

奈良橋 幸 子 東京

沼の面に向けて口笛吹いてみるもしかして鯉などが寄り来む
いづこかに笑ふ声して人の世の上なるところおぼろ月浮く
低木の白藤ふつくら咲きをれば花房分けて中を窺ふ
陽を溜めて垂るる白藤夜の闇にわれより深くねむれるならむ
漱石が鶴に生まれて立てりける夢十一夜わが夢に見き

土になりたし

和田久代 岐阜

陽をあびて日ごとに伸びる菜の茎をほきほき手折る朝の畑に
桃の花咲く下かげに老の身は座してこのまま土になりたし
くれなるのしだれ桜はゆれやすくわがはく息に花も息する
読みたるも読まざる記事もそのままに朝の新聞夕べしまひぬ
亡き夫と旅する夢のさめし夜半彼岸此岸をうつつさまよふ

母逝く

松本由利 静岡

つかの間のひとりの時に母逝きぬ兄夫婦来てのちの真昼間
母逝きてまぶしき春の空に鳴る二時四十六分のサイレン
おほろなる富士山見ゆる砂浜に棺の蓋を打つ石拾ふ
恵那の家の梅と水仙と沈丁花そなへて通夜す遠州の地に
駿河湾の波のくだける音はして音はして通夜は更けてゆくなり

金曜日 雨

小嶋啓生 愛知

ものなべて生まれたてなる月曜日さてさてわれを待つひとは誰
十五分起立矯正器に身を委ぬ週に一度の火曜日の悦
どうしても結句浮かばぬ水曜日逃げの一手の缶ビール飲む
妹よ菓子之差し入れありがたう 三月三十日木曜日 晴れ
昼食の餃子と炒飯うましうましもつと食べたし 金曜日 雨

川沿ひの桜

吉 本 由 美 大 阪

ストライクきまらぬ投手のピンチつづくグラウンドの隅のたんぽぽの花
ストライクとれぬピンチに肩入れす見知らぬチーム見知らぬピッチャー
忙しなく入るや否や出て行きぬ大阪生まれのいらちな羽虫
空を行く花粉に桜もまじりむシートを干して大きくしやみ出づ
六分咲き満開ありて川沿ひの桜それぞれの時計をひらく

青い風船

小 野 はつね 兵 庫

むきむきに咲くヒヤシンスの青色のぐるりつめたき三月の風
ふくらまない青い風船どうしても春の息吹が足りないわたし
〈NOWAR〉とニュース画面に掲げたるオフシャンニコワその名を忘れず
みどりごのこぼす喃語にまじりをり水惑星の海のおぶくが
声高き少年たちに囲まれてキャラメルを買ふ駄菓子屋へふわふわ

あをによし

立 石 千代女 長 崎

「松の湯」の跡だねここは洗髪をすれば二十円増しだったよな
新体制スタートしたる「コスモス」のバッジのやうなQRコード
春潮の満ちる川面をふるはせて黄の一輛が鉄橋わたる
ふたつみつへまをしたつてだいぢやうぶ柿の若葉がきれいぢやないか
あをによし奈良岡朋子逝きにけり煙草を粹に吸つてゐたなあ